

14、O型死亡者の病初から死亡に至る心電図所見の検討と剖検所見

国立療養所西多賀病院

山田 満 湊 治郎

D型の特徴的な心電図所見については病初から死亡に至る個人個人の進行経過における変化の集積としても検討する必要があると考え剖検所見とも対比して研究した。対照はD型死亡者64名と剖検しえた41例であるが、便宜上15才までの早期死亡例をⅠ群16～19才までを中間としてⅡ群20才以上での死亡者をⅢ群として比較検討した。入院から死亡まで2～10年にわたり3ヶ月に1度位の心電図検査によると、先づ deep Q については、病初から死亡まで一貫して誘導数も深さも同程度に進んだ者が多くⅠ群13名中8名(61.5%)、Ⅱ群22名中13名(59.0%)、Ⅲ群27名中13名(48%)であった。又 deep Q の全くない者がⅠ群1名、Ⅱ群2名、Ⅲ群4名あり、それ以外は死亡期に近づき深さも誘導数も減少してきたか或は増加してきたものであった。

TallRV₁ については一貫して R/S Ratio > 1 はⅠ群が13名中7名(53.8%)、Ⅱ群が22名中15名(68.1%)、Ⅲ群が27名中15名(55.5%)で何れも半数以上を占めた。

一方一貫して R/S Ratio < 1 はⅠ群3名、Ⅱ群3名、Ⅲ群2名であった。又入院から死亡まで一貫して R/S Ratio > 2 はⅠ群1名(0.77%)のみだがⅡ群で7名(31.8%)Ⅲ群9名(34.6%)であった。又病初のみ R/S Ratio > 2 はⅠ群3名(23.0%)Ⅱ群10名(45.4%)Ⅲ群16名(59.2%)であり末期のみ R/S Ratio > 2 はⅠ群3名(23.0%)Ⅱ群7名(31.8%)Ⅲ群11名(40.7%)であった。即ち15才以下の死亡者では R/S Ratio 高度の者少く年令の多い程高度になる傾向があり、20才以上群では病初に R/S Ratio > 2 が59.2%にみられた事が特筆された。D型の心電図では Sluning Notching, RR' 型を示す傾向が多く Conduction defect の現われと考えられ、20才以上の死亡者では全例に見られたが特に、4誘導以上に見られた者が17名(68%)を占め、15才以下ではその1/3であった。又誘導数等が一貫して同程度に経過した者がⅢ群では20名(80%)を占めたが、Ⅰ、Ⅱ群では変化が多く半数は次第に増強する者であった。S T-T の変化については15才以下での死亡者13名すべて12才以前に胸、肢誘導の2誘導以上で S T 降下或は T 陰性を示し、16才以上の死亡者43名中4名のみが12才以前に S T-T 降下を示したにすぎず、早期死亡と S T-T とはかなり関連があると考えられた。次に死亡前1ヶ月以内の心電図が確認できた者全年令49名中1名のみが S T-T 降下著明でなく、2名は S T 上昇を示したが、残り46名はすべてⅠ、Ⅱ、Ⅲ AVF、V₅、V₆ 等の S T-T 降下を示したのである。

P の増高については、死亡末期の規準ではⅠ群8名(57.1%)Ⅱ群13名(59.0%)Ⅲ群16名(57.1%)であり各年令群で均等に現われた。又Ⅲ群では10名(35.7%)が死亡までの2年8ヶ

月～6年間連続してP増高が現われたが、I群では末期のみに現われた者が多かった。Pの終始正常と見られた者はI群4名(28.5%)II群7名(31.8%)III群7名(25.1%)であった。以上の様な心電図の主要所見と41名の剖検所見の中最も多くみられた心筋 Fibrosis 肺Athelc fasis 肺うっ血浮腫、心拡張肥大とを対比してみたが、I群15才以下のP増高と Fibrosis Athelcfasis との頻度が関連するが、年齢の進む程 Fibrosis との関連が多くなる傾向があり、それとII群III群のST-T降下とIII群のP増高、deep Q, RR' とは頻度での関連があると思われた。

〔むすび〕

病初から死亡までの進行経過からみると早期死亡例と20才以上の様な年齢の進んだ死亡例とは主要な心電図所見の進み方でかなり違った特徴が現われていて予後的な推測に役立つと思われた。又年齢の進む程 Fibrosis との関連が多くなる傾向がみられた。

15 PMDの Motor unit potential における late component について (予報)

国療箱根病院

村上慶郎 岡崎 隆
中村正敬

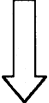
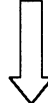
Neurogenic atrophy, denervation の筋に針電極を使用してEMGを行う際、刺入後 main motor unit potential のあとに数ヶの小さい potential が出現することがあり、Borensteinらはこれを late components と称している。この potential は正常人の筋にも数%以下に出現するといわれている。

私共は筋疾患についてこの late components について検討を行った。

正常人対照として脊損による対麻痺患者の上腕二頭筋(両側)11例について行った。年齢は20才から52才、全部男性である。

進行性筋ジストロフィー症9例(Duchenne型4例、LG型3例、FSSH型2例)について検討した。いずれも男性で年齢は18才から40才までであった。又、K-W病2例(18才、36才の男性)についても行った。

結果は正常人11例中1例に late components をみた。Duchenne型4例はいずれも出現しなかった。LG型、FSSH型には各々1例づつみられた。K-W病は2例共出現していた。このK

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

D 型の特徴的な心電図所見については病初から死亡に至る個人個人の進行経過における変化の集積としても検討する必要があると考え剖検所見とも対比して研究した。対照は D 型死亡者 64 名と剖検しえた 41 例であるが、便宜上 15 才までの早期死亡例を 群 16~19 才までを中間として 群 20 才以上での死亡者を 群として比較検討した。入院から死亡まで 2~10 年にわたり 3 ヶ月に 1 度位の心電図検査によると、先づ deep Q については、病初から死亡まで一貫して誘導数も深さも同程度に進んだ者が多く 群 13 名中 8 名(61.5%)、 群 22 名中 13 名(59.0%)、 群 27 名中 13 名(48%)であった。又 deep Q の全くない者が 群 1 名、 群 2 名、 群 4 名あり、それ以外は死亡期に近づき深さも誘導数も減少してきたか或は増加してきたものであった。